

志賀直哉年譜考 (五)

——明治三十四年から明治三十六年まで——

生 井 知 子

明治三十四年 (一九〇一)

(数え十九歳・満十七・十八歳)

1・8 学習院で新年始業式。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「記事摘要」)

1・25 青田綱三が、総武鉄道株式会社社長に就任。(第三版『帝國鉄道要鑑』)

2・11 学習院で紀元節奉祝式。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「記事摘要」)

2・20 歌舞伎座で一週間、チャール・テラー一座の西洋演劇『リッツアーインタル』(リップ・ヴァン・ウィンクル)三幕など上演。(『歌舞伎年表』八卷)直哉も見た。(『新しい歌舞伎』)

この年の春か? (里見淳・十四になる春休)

鎌倉の別荘で、病後を養う有島生馬を、直哉は黒木三次と共に泊まり掛けて見舞う。(里見淳『君と私』二)

3・? 有島生馬は平佐村へ転地。学習院は四年で退学していた。(里見淳『小説 二十五歳まで』)

3・2 輔仁会臨時大会開催。大村仁太郎・白鳥庫吉の欧行を送別。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「輔仁会記事摘要」)

摘要)

3・9 隅田川上流で新艇三隻の漕初式。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「輔仁会記事摘要」)

4・15 吾妻橋上流で、輔仁会の第七回端艇競漕会が開催される。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「輔仁会記事摘要」)

4・18 高等学科及び中等学科四年級以上の学生百十三名が箱根地方へ三泊行軍。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「記事摘要」)

月「記事摘要」)

5・5 親王命名式につき、学習院で奉祝式。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「記事摘要」)

5・26 輔仁会春季大会開催。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「輔仁会記事摘要」)

5・28 異母妹・志賀淑子が生まれる。(志賀家系図)

6・8 学習院で剣道大会。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「記事摘要」)

この年から 二十世紀大挙伝道が実行に移される。(『教文館『日本キリスト教歴史大事典』)

この頃(夏休みの初め)

靈南坂教会で大挙伝道。正則英語学校に通っていた四つ年上の書生・末永馨に連れられて、直哉は靈南坂教会に通う。牧師は小崎弘道。江原素六の説教も聞いた。他の教会にも説教を聞きに行った。アメリカから来た(明治三十四年十月来日、M 34・10・7「読売新聞」)モット博士の「青年の誘惑」というオナニズムについての露骨な説教に心を打たれた。救世軍のブースの話も聞いた。(『わが生活信条』「演説的印象」)『内村鑑三先生の憶ひ出』(『稲村雑談』「内村鑑三」)『或る男 其姉の死』「自転車」(『草稿』「第三篇」二)『自転車』

ある晩、赤坂病院で、「エホバは父、キリストは母」であり、柔らかな愛情を持った母・キリストによって厳格な父・エホバに罪をわびて貰わねばならぬという宣教師(種田?)の説教を聞き、かつて自分が自転車屋にした不正を思い出し、悔い改めをする。翌朝、理由を言わずに志賀留女に十四貫い、萩原の所に謝りに行く。萩原はようやく五円だけ(十円)受け取る。(『草稿』「第三篇」二)『或る男 其姉の死』「自転車」(『草稿』「第三篇」二)『自転車』

この頃、直哉はユニオンという自転車に乗っていた。(草稿『第三篇』二)

*赤坂病院は、アメリカ公使館の書記官だったが、中年から医学を学んだフレンド派のW・N・ホイトニーが開設した。(安倍能成『我が生ひ立ち』)

*キリスト教世界において、母として神への取りなしの役が求められる場合はマリアが登場するが、プロテスタントではマリアは登場しないため、キリスト^{II}母とされたか。(鈴木範久『内村鑑三をめぐる作家たち』)

学習院正堂で卒業証書授与式。(『学習院一覽 明治三十四年九月―三十五年八月』「記事摘要」)

直哉は、黒木三次らと箱根を越えて熱海に行き、記念撮影。(『新潮日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写真)

内村鑑三、角筈女学校にて第二回角筈夏期講演会を開く。八月三日まで。講師は、内村鑑三の他、留岡幸助、巖本善治、大島正健、田村直臣。(『第二回角筈夏期講演会日誌大要』M34・8・25「聖書之研究」)

第二回講演会第一日の午前の説教を聞いて興奮した末永馨に連れられ、直哉は夜の会から参加する。初めて内村鑑三と会い、弟子となった。内村の祈りは、それまで教会で聞いたものとは全然違って、力と不思議な真実さがこもっていた。講演会には、直哉は午前と夜だけ参加する。(草稿『第三篇』二)〔手帳8〕補⑤p28)〔『稲村雑談』「内村鑑三」〕〔内村鑑三先生の憶ひ出〕

直哉は、生涯で影響を受けた人として、師としては内村鑑三先生、友としては武者小路実篤、身内では祖父・志賀直道を挙げている。正しきものに憧れ、不正虚偽を憎む気持を先生によって引き出された事、社会主義にかぶれなかつた事は実にありがたい事に感じているという。(『内村鑑三先生の憶ひ出』)

『内村鑑三先生の憶ひ出』の中で、直哉は、自分と同じ頃、内村鑑三の所へ集まったメンバーとして、小山内薫・倉橋惣三・岩波茂雄・西沢勇志智・大賀一郎・田中龍夫・浅野猶三郎・小野保之・大河平(隆光、M34・8・25「聖書之研究」)・グンデルトなどの名を挙げている。天野貞祐や落合太郎は、直哉が通っていた最後の二年頃に来た。岩倉道

俱・黒木三次は直哉の紹介で内村の所へ来るようになった。長与善郎・高木八尺はもっと後。飛び入りで、山室軍平や有島武郎も時々来た、という。

岩波茂雄は、直哉の流暢でない祈りを記憶している。(岩波茂雄『内村先生』「追想集 内村鑑三先生」)

7・27 第二回角筈夏期講演会で記念撮影。(『第二回角筈夏期講演会日誌大要』M34・8・25「聖書之研究」)*無教会史研究会『無教会史Ⅰ』に、この時の写真が掲載されている。倉橋惣三・浅野猶三郎・小山内薫・志賀直哉らも写っている。

7・31 夏期講演会で、直哉は、高野孟矩が高等法院事件について語るのを聞く。(『第二回角筈夏期講演会日誌大要』M34・8・25「聖書之研究」)(内村鑑三先生の憶ひ出)

7・? 有島生馬、東京外国語学校伊太利語科に入学することとなる。(『初期白樺派文学集』有島生馬年譜)

8・1 夏期講演会の参加者一同、田村直臣の自営館、巖本善治の明治女学校を訪問。留岡幸助の家庭学校にも回った。(『第二回角筈夏期講演会日誌大要』M34・8・25「聖書之研究」)(内村鑑三先生の憶ひ出)

9 中等学科六年に進級。……………

9・11 学習院で学年始業式。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「記事摘要」)

9・30 この時点で、六年級乙組は、永井直翠、真田幸久、奥平昌国、伊東太郎、今園国員、山内豊中、市野季雄、本多実芳

上倉俊、川村盾夫、蛭間幸成、斉藤義雄、川村弘、井上正義、三條公輝、黒木三次、鳥居忠強、黒岩信一、谷守人、志賀直哉、海江田鷹次郎、西郷從志、細川源四郎。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』)

輔仁会の第五回陸上運動会を開催。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「輔仁会記事摘要」)

10・13 学習院で開院記念式。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「記事摘要」)

10・18 輔仁会秋季大会開催。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年八月』「輔仁会記事摘要」)

10・20 高等学科及び中等学科四年級以上の学生百二十六名が大山地方へ三泊行軍。(『学習院一覽 明治三十四年九月〜三十五年

八月「記事摘要」

11・1 東京基督教青年会館で開かれた足尾鉾毒演説会で、安部磯雄、巖本善治、木下尚江、島田三郎、内村鑑三が、講演。

〔内村鑑三全集〕年譜

この頃か？

直哉は、美土代町の青年会館で、内村鑑三、安部磯雄、片山潜、木下尚江らの足尾銅山鉾毒事件糾弾の演説会を聞き、自分も被害地を見に行くと言張し、古河市兵衛との関係を重んじて行つてはならぬと言ふ志賀直温と争う。志賀直道は一言も言わなかった。志賀留女が間に入り、直哉は行く事をやめ、かわりに被害民に着物等を送る事で決着。(稲村雑談「渡良瀬川鉾毒事件」(祖父)二十)(座談会「白樺」座談会)

直哉に誘われた有島生馬・田村寛貞・川村弘は鉾毒地視察に参加。(有島生馬「思い出の我」)

11・3 学習院で天長節奉祝式。その後、学生一同、青山練兵場に赴き、観兵式を陪覧。(学習院一覽 明治三十四年九月三十

五年八月「記事摘要」)

11・5 靖国神社臨時大祭で、学習院学生一同参拝。(学習院一覽 明治三十四年九月三十五年八月「記事摘要」)

11・6 天皇の奥州への行幸を学習院学生一同、宮城正門外で奉送。(学習院一覽 明治三十四年九月三十五年八月「記事摘要」)

11・9 学習院で柔道大会。(学習院一覽 明治三十四年九月三十五年八月「記事摘要」)

11・12 学習院学生一同、天皇の還幸を宮城正門外で奉迎。(学習院一覽 明治三十四年九月三十五年八月「記事摘要」)

11・15 細川護立・正親町公和・木下利玄が文集「曉鳥」を発行。(紅野敏郎「木下利玄論(上)」S 55・10「文学」掲載のM 35秋発行の回覧雑誌「曉露」の細川護立の文章)

11・20 学習院学生一同、赤坂離宮御苑で菊花を拝観。(学習院一覽 明治三十四年九月三十五年八月「記事摘要」)

この年か？ (中等科の五年生ぐらいの頃、内村の所へ行くようになってから)

直哉は、西洋の宗教的な絵に興味を持ちだし、教文館に来ていたコスモスピクチャーの複製のラファエルやムリロ

(ムリリヨ)のマドンナなどをよく買った。ダ・ヴィンチ、ミケルアンジェロ、ラファエルなどの名を知った。(『美術雑談』「美術が好きになった経路」(『書き初めた頃』)、『新年随想』「絵と陶器」)

教文館で買ったキリストの生涯の画集の後にブレイクの木版がひとまとめにしていたが、ひどくグロテスクに見え、嫌悪を感じる。後年は非常に好きになる。(『書き初めた頃』)

この年からか? (キリスト教を信じた頃)

直哉は、特別な場合の他は、墓の前でお辞儀をしない習慣になる。(『和解』一)

この年からか? (二十歳ごろから)

直哉は、神社仏閣の前を通ってもお辞儀をしないことにする。(『新年随想』「末年」)

明治三十五年(一九〇二) (数え二十歳・満十八・十九歳)

1・8 学習院で新年始業式。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「記事摘要」)

この頃か? 直哉は、中等学科一年の子供(柳沢保丞)を強く愛し、その子供が入っていた、学校の幹事(四谷区大番町九・有馬純臣、

M35・1・31直哉宛有馬生馬書簡)が開いていた私塾に入り、同室になる。間もなく二人は普通の友達以上の関係になり、

直哉は激しい性欲の圧迫を感じる。(『ノート13』補⑥ p.292〜294)

1・30 「日曜は角苦に行くから参加できない」と直哉が言ったため、この日まで睦友会を延ばしたが、川村弘が四谷大番町

の家塾まで誘いに行くと、直哉は「塾の小さい連中と上野の動物園に行くことにしているから」と断る。(『蝕まれた

友情』一)(M35・1・31直哉宛有馬生馬書簡)

1・31 直哉の気持ちを問いたです手紙を有馬生馬が出す。(『志賀直哉宛書簡集』(『蝕まれた友情』一))

2・1 直哉は、有馬生馬に「塾の子供達と遊ぶ方が面白いから断った」と返事を出す。(『蝕まれた友情』一)

2・2 直哉の返事を正直だと評価しつつ、今後注意するようにとの葉書を有島生馬が出す。(『志賀直哉宛書簡集』(『蝕まれた

友情』一)

2・7 志賀直温、総武鉄道会社支配人兼会計課長となる。(志賀家系図) *第三版『帝国鉄道要鑑』によれば、二月十二日。

2・11 学習院で紀元節奉祝式。(『学習院一覽』明治三十五年九月〜三十六年八月)「記事摘要」

春 直哉ら百人一首が好きな仲間が武者小路公共の所に百人一首をしに行く。武者小路実篤は、直哉を運動家として、お

しゃれとして知っていた。(武者小路実篤『或る男』六十五)

3・2 輔仁会春季大会を開催。(『学習院一覽』明治三十五年九月〜三十六年八月)「輔仁会記事摘要」

この頃か? 里見淳・児島喜久雄・中村貫之・菅田敏光・大村謙太郎ら七人が同級生の会・壬寅会を結成。絵画の展覧会を開いた

り、年に三度程回覧雑誌を出したりした。一年ほどで立ち消えになる。(里見淳『小説 二十五歳まで』(里見淳『絢友会

の生れ』)

春頃から 直哉は、神経衰弱になり、学校を休む。(『山荘雑話』「月見」)

4・14 隅田川上流で、輔仁会の第八回端艇競漕会を開催。(『学習院一覽』明治三十五年九月〜三十六年八月)「輔仁会記事摘要」

4・17 高等学科及び中等学科四年級以上の学生百十五人が伊豆地方へ三泊行軍。(『学習院一覽』明治三十五年九月〜三十六年八

月)「記事摘要」

5・17 直哉は、学習院柔道紅白勝負で三人抜きをする。(新『志賀直哉全集』年譜)

5・24 学習院で剣道大会。(『学習院一覽』明治三十五年九月〜三十六年八月)「記事摘要」

6・19? 直哉は、田中仁之助や、三、四歳年下の青山と一緒に、歌舞伎座に活動写真を見に行く。十時頃(九時頃)はねると

月夜だったので、直哉は田中仁之助と共に、鈴ヶ森に月見に行き、そのまま東海道を歩く。青山に頼んで、二人の自

宅には電話を掛けて貰った。(『山荘雑話』「月見」(『手帳10』補⑤P287〜287)「祖父」十九)

6・20?

直哉と田中仁之助は、東京まで帰る汽車賃がなかったので、程ヶ谷から汽車に乗り、田中の親戚の鎌倉の伊地知家に行く。箱根に行く事にし、直哉は、祖父に至急金を送って欲しいという葉書を出す。伊地知家には三日世話になった。

〔山荘雑話〕「月見」〔手帳10〕補⑤ p.285~287

伊地知彦次郎は、明治二十年代に在イタリア公使館附武官を勤めた海軍軍人で、当時軍艦松島艦長の大佐。(阿川弘之

『志賀直哉』)

6・21

鎌倉の伊地知家に泊っている直哉に、志賀直道が、戻るようにとの手紙を早朝、「用ある直ぐかへれ」という電報を屋頭出す。〔祖父〕二十五)〔手帳10〕補⑤ p.285~287

〔六月廿二日未明〕の志賀直道の直哉に対する叱責の手紙が、この時のものか?〔手帳10〕補⑤ p.285~287)〔山荘雑話〕

「月見」直哉には、この時以外に、直道に叱られたという記憶はない。(『祖父』十九)

この日、志賀直道は、島地黙雷の説教を聞きに行く。直哉も有島生馬に連れて行かれた事があるが、話は別に面白くなかった。直道は六月二十七日には天真寺に雲照律師、二十八・二十九日は玉窓寺に西有穆山の仏書講義を聴きに行っている。七月六日にも島地黙雷の話聞きに行った。その他、村上専精、大内青巒などの話も聞きに行った。結局、芝の青松寺の北野元峰が好きになったのか、相馬家へ時々呼んで、皆で禅の話聞く会を作った。(『祖父』二十五)

6・30

この時点で、総武鉄道株式会社の持ち株は、相馬順胤が五〇〇〇株、志賀直温が二二一〇株、石川栄昌が一四六七株、青田綱三が一二八〇株。明治三十五年上半期の総武鉄道株は、払込額五十円、時価五十四円八十銭、配当率は九分。

(第二版『帝國鉄道要鑑』)

7・?

志賀直温、日本醋酸会社監査役となる。(志賀家系図)

7・11

学習院正堂で卒業証書授与式。(『学習院一覽 明治三十五年九月~三十六年八月』「記事摘要」)

中等学科六年を卒業できなかった為、直哉は、木下利玄・正親町公和・武者小路実篤らと同学年になる。(新『志賀直哉全集』年譜)

総平均が良くて落第した点で、直哉はレコード破りだった。(武者小路実篤『或る男』六十八)

直哉は、生涯で影響を受けた人として、師としては内村鑑三先生、友としては武者小路実篤、身内では祖父・志賀直道を挙げている。(『内村鑑三先生の憶ひ出』)

土浦から、有島生馬が、直哉に葉書を出す。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・20
直哉は、片瀬の田中平一に手紙を書く。昨日、丸善で、Oliver Cromwellを買おうとしたが高かったので、トルストイの The Spirit of Christ's Teaching を買った。昨夜は「彦の所に行った。明日、岩元と葉山に行く」と記す。(M 35・7・22 田中平一宛書簡)

7・23
原ノ町から、有島生馬が、直哉に葉書を出す。(『志賀直哉宛書簡集』)

7・25
内村鑑三、角筈女学校改め精華女学校にて第三回角筈夏期講談会を開く。八月三日まで。講師は、内村鑑三、大島正健、黒岩周六ら。(『第三回角筈夏期講談会日誌』M 35・8・25「聖書之研究」)

直哉は、末永馨とともに千駄ヶ谷(千駄ヶ谷村八百五十三番地、M 35・7・26 田中平一宛書簡)に小さな汚い家を一軒借りて、そこから角筈の講談会に通う。内村の言葉に真に同感するならば伝道師にならねばならぬと思うが、現世的な快樂へのあこがれが強くある。(『ノート13』補⑥ p 291~292)

7・26
直哉は、田中平一に手紙を書き、返りで二日遊んだこと、昨日引越したことを記す。(M 35・7・26 田中平一宛書簡)

7・27
第三回角筈夏期講談会で写真撮影。(『第三回角筈夏期講談会日誌』M 35・8・25「聖書之研究」) *この時の写真は、政池仁『内村鑑三伝』に掲載されている。志賀直哉・有島武郎・末永馨・小山内薫・大賀一郎・西沢勇志智・倉橋惣三・

7・28

小野保之・浅野猶三郎・渡辺三造・鹿子木員信らも写っている。

夏期講演会のメンバー、小金井へ遠足。(『第三回角笈夏期講演会日誌』M35・8・25「聖書之研究」)(内村鑑三先生の憶ひ出)

*未定稿2には《本年八月親しき友と(中略)小金井を訪ひ》、友はドイツの哲学者・フェイネル(フェヒナー)について語った、とある。

7・31

第三回角笈夏期講演会の夜の園遊会后、直哉が笛を吹き歓声があがる。(『第三回角笈夏期講演会日誌』M35・8・25「聖書之研究」)

第三回夏期講演会后、内村鑑三の角笈の自宅での日曜午前の聖書講義に聴講を許された者は、浅野猶三郎・小山西薫・倉橋惣三・西沢勇志智・沢野道太郎・小野保之・中村新太郎・小出満一・石橋智信・大賀一郎・志賀直哉・森本慶三・青山士・田中龍夫・小菅勇・鹿子木員信・吉川一水・石塚保吉・栢森誠・赤石由助・葛巻行孝。(無教会史研究会『無教会史』I)

この頃、内村鑑三の朝の講義に出席する人数は二十五人と限定され、一々内村から出席を調べられ、二回以上の無届欠席は除名になった。第一年の終わりにには課題を出されて答案を取られた。(大賀一郎『角笈より柏木へ』『追想集 内村鑑三先生』)

角笈聖書研究会は、毎日曜日午前十時から角笈の内村鑑三の書齋で開かれた。家屋狭隘のため、会員数を二十五名に限った。明治三十五年に学んだのは、旧訳聖書の「サムエル前書」「伝道之書」全部、「サムエル後書」の前半部。(M35・12・25「聖書之研究」(雑録))

8・15

直哉は、『人身発達の理想的理想』を執筆。卑しい欲望を発する肉体を捨て、頭部のみになる事が理想とする。(未定稿1)

この年(信徒になって一年目)

直哉は、少年と同性愛体験を持ち、二、三ヶ月で監督している教師と養父とから交際を禁止される。その後、一人で歌舞伎座の芝居を見に行き、歌舞伎に夢中になる。それまで芝居には四度しか行った事がない。欲情に苦しみ、レーノルズの『天使の頭』という写真銅版画を部屋に掛け、頭だけの復活を願う。(草稿『第三篇』二)

9・11 学習院で学年始業式。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「記事摘要」)

9・13 月給二十円で直哉の英語の家庭教師を依頼しておいた平田元吉と岩元楨、来宅。岩元と岩倉道俱が相談し、一年間、平田に英語を習う代りに、高等科でドイツ語を勉強する際には、岩元が無償で教えるという条件。月謝は父ではなく祖父が出してくれた。平田には学校の帰途一時間教わった。直哉は、文法をまるで知らなかったため、斉藤秀三郎のプライマーから始めて、六、七冊勉強する。ラムの『シェークスピア物語』も教えて貰った。ずいぶん怠けていたが、文法がいくらか分かって、それからは、自分でも英語の本を少し読むようになった。(祖父『二十一』(座談会『志賀直哉日記をめぐって』)

9・30 この時点で、甲武鉄道株式会社の持ち株は、志賀直道が八六六株、青田綱三が五〇〇株。明治三十五年上半期の甲武鉄道株は、払込額四十五円、配当率は一割三分。(第二・三版『帝國鉄道要鑑』)

秋? 細川護立・正親町公和・木下利玄の晩会が回覧雑誌「曉露」を發行。表紙・口絵は児島喜久雄。(紅野敏郎『木下利玄論(上)』S 55・10「文学」)

10・12 輔仁会の第六回陸上運動会を開催。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「輔仁会記事摘要」)

10・18 学習院で開院記念式。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「記事摘要」)

輔仁会秋季大会を開催。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「輔仁会記事摘要」)

10・20 高等学科及び中等学科四年級以上の学生百四十五名が土浦地方へ三泊行軍。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年

八月「記事摘要」

11・3 学習院で天長節奉祝式。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「記事摘要」)

11・6 靖国神社大祭に付き、学習院学生一同参拝。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「記事摘要」)

11・7 熊本県下への行幸に付き、学習院学生一同宮城正門外で奉送。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「記事摘要」)

11・13 学習院学生一同、赤坂離宮御苑で菊花を拝観。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「記事摘要」)

有島生馬が、箱根塔ノ沢玉湯で病氣療養中の直哉に手紙を出す。(『志賀直哉宛書簡集』)

11・13

歌舞伎座で「里見八犬伝」「忠臣仮名書講釈」「高時」「江島育根生児菊」を上演。「里見八犬伝」は団十郎の犬山道節、芝翫の娘はま路、「忠臣仮名書講釈」は芝翫の女房おりゑ、団十郎の矢間重太郎、菊五郎の矢間喜内、「高時」は団十郎の北条高時、「江島育根生児菊」は五代目菊五郎の一世一代の弁天小僧、家橘の南郷力丸。(『統統歌舞伎年代記』乾卷)

直哉は、五代目尾上菊五郎の「弁天小僧」を見て面白く思う。林三郎が芝居好きで芝居の話は聞いていたが、初めは一人で行った。平土間の真ん中で見た。五代目菊五郎の最後の舞台で、二回目からは林三郎と行き、三回見た。その時の一番目が「八犬伝」で団十郎の犬山道節、中幕が「高時」と「忠臣講釈」の七つ目で、重太郎を団十郎、喜内を菊五郎がやった。菊五郎を見られたのは、一興行のみ。九代目団十郎は三興行程見た時死去。団十郎の方は真価がよく分からなかった。(『稲村雑談』『芝居熱』)(『書き初めた頃』)(『歌舞伎放談』『団十郎・菊五郎』)(座談会『回顧』)

直哉は、「忠臣講釈」では、団菊より、辻君をして病気の舅を養っている芝翫のおりゑの方をよく思った。「八犬伝」では団十郎の声がそれほど大きくないのに客席までよく通ったことを覚えていた。「高時」では、弟子達が烏天狗で、高時をいじめるのだが、師匠をいたわっているのが面白かった。菊五郎の弁天小僧は非常に面白かった。スキヤンダ

ルが新聞に出た家橋を菊五郎が叱りつけるような台詞を言った。(『夢か』)

芝居は朝十時から始まるから日曜日でなければ見に行けず、直哉は三河台の自宅から宿俣で角筈まで行き、俣を待たせておいて、内村鑑三の話が終わると、すぐに木挽町まで飛んでいった。芝居は歌舞伎座か明治座、東京座、正月は左團次が横浜の喜楽座にかかるので、二日に横浜まで出掛けた。最初の頃は一つ芝居を二度も三度も見ないと気がすまなかった。立見ではなく、土間の真ん中で見た。(『稻村雑談』「内村鑑三」芝居熱)

この頃

死んだ母に対するあこがれから、直哉は、中村芝翫の演ずるおりゑに恋し、そういう女の愛人としても子供としてでもいいから只その大きい懐に小さくなって抱かれないと思う。直哉は同性の愛に対しては自身が受動の立場になる事を非常に不快に感じながら、異性に対してはそれを望む気が強かった。(『濁った頭』関連草稿)

11・19

還幸を学習院学生一同宮城正門外で奉迎。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「記事摘要」)

11・22

学習院で柔道大会を開催。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』「記事摘要」)

12・10

直哉は、『学習院輔仁会雑誌』第五十九号「玉石同車」欄に「某」の署名で『所感』を発表。興風会を批判する。↓
『濁った頭』(一)のモデル

この頃か？

(里見弴・十五)

睦友会と壬寅会とで戸山の原で野球の試合をする。直哉と有島生馬・里見弴は田村寛貞の家で晩飯の御馳走になる。帰りに里見弴は直哉に負って貰う。(里見弴『君と私』四)(里見弴『小説 二十五歳まで』)

12・31

この時点で、六年級乙組は、永井直翠、伊東太郎、西脇從志、志賀直哉、斉藤義雄、前田利為、木下利玄、徳川慶久、諸岡甲松、北尾富烈、正親町公和、大河内正倫、仁礼景雄、岩倉具広、立花恭忠、鳥居忠一、佐野智勝、田尻鐵太郎、黒田長敬、細川護立や武者小路実篤は六年級甲組。(『学習院一覽 明治三十五年九月〜三十六年八月』)

この時点で、日本鉄道株式会社の持ち株は、相馬順胤が一八八五株。明治三十五年下半期の日本鉄道株は、払込額五十円、時価七十七円二十銭、配当率は一割二分。(第 二 版『帝國鉄道要鑑』)

この年前後か? (中学のおしまい頃)

直哉は、泉鏡花に熱中する。『風流線』(M36・10・24) M37・3・12「国民新聞」あたりまでは、鏡花のものを一つ残らず読んだ。(座談会「回顧」)(愛読書回顧)

この年か? 直哉は、青山高樹町の石膏像を作る家へ行き、ミロのヴィーナスの像を作って貰おうとして断られる。代わりに人間大の顔だけのヴィーナスの石膏像を買い、異性へのあこがれの堪えられない気分に戻えて、時々接吻する。(濁った頭) (関連草稿)

この年か? 直哉は、前の家の、二歳ほど上の美しい女の人を漫然と恋する。また志賀浩を漠然と恋する。直哉が、夜なべをしている浩と話しているとはしばしば寝ていた妹が目覚まして泣き出し、志賀直温が怒ったような声で浩を呼んだ。直温がわざと妹を起こすのではないかと邪推する。もし浩に恋を打ち明けられたら、身を引こうと空想する。(濁った頭) (関連草稿)

この年か? 直哉は、手淫を罰するために、マッチを擦って腿へのせた。(里見弴「君と私」二十一)(濁った頭) (関連草稿)

この年か? 直哉は、針仕事が多まった時によく呼ぶ「沢屋の婆ア」という、尾上松助に似た、みにくいが穏やかな性質の六十歳以上の女が、離れ二階の下に泊まっているのに対して、性欲の衝動を感じるがあった。(濁った頭) (関連草稿)

この年か? 直哉は、岩元禎の家に行くようになり、岩元からギリシャ・ローマの彫刻やルネッサンスの絵について話を聞いたり、写真を見せて貰ったりした。岩元と藤島武二は従兄弟だったので、藤島の家にも遊びに行つて絵を見せて貰ったりした。直哉は神経衰弱で学校を休んで一人箱根に行った事があるが、ダ・ビンチの画集とバーン・ジョーンズの画集を藤島に美術学校の図書室から借り出して貰い、持って行った。(美術雑誌「美術が好きになつた経路」)

岩倉道俱の姉で森有礼の未亡人・寛子の所に、岩元禎が出入りしていた事から、岩倉の紹介で、直哉は岩元と知り合った。岩元は、直哉に、ホーマー（ホメロス）、ユーリピデス（エウリピデス）、エシロス（アイスキュロス）、ソフォクレス、アリストファネス、ヴァージル（ウェルギリウス）、ダンテ、ゲーテ、シラー、スコットの『アイヴァンホー』、カントの認識論などを話して聞かせる。（祖父〔二十一〕）岩元禎には、よくギリシャ神話を聞いた。（書き初めた頃）この年か？（十九か二十の時）

直哉は、岩元禎と芝公園を散歩した帰り、愛右下の寺尾という店で石膏の「ヴィーナスの誕生」を見つけ、買おうとするが、いたづらがあるから買わない方がいいと岩元に止められる。この店ではゲーテとシラーの胸像、バッハとハイドンの立像、アポローとダイアナの像、トルワルドセンのヤゾンなど七つの陶器の像を買って持っていた。（『ヴィーナスの割目』）

明治三十六年（一九〇三）（数え二十一歳・満十九〜二十歳）

1・1 直哉は、松平春光・有島生馬・田村寛貞と写真撮影。（『字研』現代日本文学アルバム 志賀直哉「掲載・写真」）

1・1 東京座で「児雷也豪傑物語」「扇的西海硯」「一谷凱歌小謡曲」「明治俠客今長兵衛」を上演。八百歳の烏山勘兵衛、

家橋の今長兵衛、猿之助の石川佐十郎、丑之助の玉屋女中おはる。（『統統歌舞伎年代記』乾巻）↓『襖』のモデル

1・2 直哉は、横浜の喜楽座まで左団次を見に行く。（『歌舞伎放談』「初代左団次」）（『稲村雑談』「芝居熱」）

1・8 学習院で新年始業式。（『学習院一覽』明治三十六年九月〜三十七年八月）（『記事摘要』）

1・14 明治座で「神靈矢口渡」「三千両宝和歌山」「柱立曾我礎」「三巴獅子戯」を上演。初世左団次の頓兵衛、米蔵のお船。

（『統統歌舞伎年代記』乾巻）

直哉は、左団次は「矢口」の頓兵衛がよかったと思う。（『歌舞伎放談』「初代左団次」）（『新しい歌舞伎』（M37・1・2日）

記)

- 1・29 木下利玄が、直哉に絵葉書を出す。(志賀直哉宛書簡集)
- 2・4 志賀直道が相馬家事務顧問となる。(志賀家系図)
- 2・8) 宮戸座で「関東名物男達鑑」「安達原」「連獅子」「鬼薊廓色縫」を上演。栄三郎の十六夜。(統統歌舞伎年代記「乾巻」)
- 2・11 学習院で紀元節奉祝式。(「学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月」「記事摘要」)
- 2・18 彰仁親王薨去に付き、学習院では三日間授業を休止。(「学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月」「記事摘要」)
- 五代目尾上菊五郎が死去。(「統統歌舞伎年代記」乾巻)
- 五代目菊五郎が死んだ時、宮戸座に出ていた栄三郎(後の梅幸)は休まなかった。直哉はちょうど見ていた。(対談『すまう今昔物語』)
- 2・26 彰仁親王葬送に際し、学習院初等学科四年級以上の学生一同、音羽護国寺の仁王門内で奉送。(「学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月」「記事摘要」)
- 2・28 末永馨、サンフランシスコに向い出発。(M37・2・28日記)
- 末永は渡米に際して、直哉の事を岩元禎に頼んでいった。(「内村鑑三先生の憶ひ出」)
- この時点で、総武鉄道株式会社は社長・青田綱三、支配人兼会計課課長・志賀直温。(第2版「帝国鉄道要鑑」)
- 角筈の日曜朝の集会后、内村鑑三の家の前で写真撮影。浅野猶三郎・大賀一郎・倉橋惣三・小山内薫・志賀直哉らが写っている。(「浅野猶三郎『角筈時代のおもひで』」「追想集 内村鑑三先生」)
- 3・? 輔仁会春季大会開催。(「学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月」「輔仁会記事摘要」)
- 3・8 直哉は、中等科六年の英語対話(The Man and the Money)に、一條道良・大河内正倫・小山三郎とともに出演。(M36・5「学習院輔仁会雑誌」60号「雑報」)

歌舞伎座で「清正誠忠録」「吉例曾我礎」「花盛劇楓葉」「鷄合男子舞」を上演。五代目菊五郎の遺児・丑之助が六代目菊五郎、栄三郎が梅幸、英造が栄三郎を襲名。團十郎の清正、工藤祐経。(『統統歌舞伎年代記』乾巻)

直哉は、後年になって、清正が夢から覚めて一言「夢か」と独語のように言って幕を閉める所が非常によかったと思う。(『夢か』) (『歌舞伎放談』「團十郎・菊五郎」) (座談会「回顧」)

この頃か？

直哉は、鹿野山でふと景色を非常に美しく感じ、景色を見る目が開ける。鹿野山には五六年続けて行っていた。その後二年ほどして、一人旅の汽船の上で、月が能登半島の上に沈みかけると剣山の後から非常に美しい曙光が昇ってくるのを見る。(『旅』)

4・6

隅田川上流で、輔仁会の第九回端艇競漕会を開催。(『学習院』一覽 明治二十六年九月～二十七年八月) (『輔仁会記事摘要』)

4・8

学習院の大学科・高等学科・中等学科四年級以上の学生のうち希望者が、神戸沖における観艦式の拝観と大阪・奈良・京都への修学旅行。十六日帰京。(『学習院』一覽 明治二十六年九月～二十七年八月) (『記事摘要』)

春頃

直哉は、林三郎、松平春光と横浜から神戸まで船で赴く。学校の修学旅行だと神戸の観艦式を見なければならず、芝居が見られないので、三人で別行動を取った。川田順(この時が初対面)、山本と連れになり、共に明石の宿屋に泊って歌舞伎の五人男風に宿帳をつける。上方役者の主なところを一通り見ようというのが旅の目的で、神戸の大黒座で、片岡我当(後の仁左衛門)の「三日月治郎吉」、大阪中座で、中村雁治郎の「すし屋」を見る。京都の新京極の歌舞伎座では、市川団蔵の「時は今、桔梗の旗挙げ」を見、「馬鹽の場」の光秀に感心する。「玄治店」では団蔵が与三郎をやった。(『稲村雑談』「芝居熱」) (『歌舞伎放談』「京都で見た団蔵」「先々代仁左衛門」) (S 24・8・21直哉宛川田順書簡)

神戸の大黒座では、我当・橋三郎・徳三郎一座の「扇富士蓬萊曾我」(敷皮)を見た。(M 37・1・10日記)

人形浄瑠璃は、越路太夫の「近頃河原達引」堀川の段、人形遣は紋十郎、玉造を見る。(M 37・1・9日記)

赤坂病院で悔い改めをした時の宣教師(種田?)が、大阪の第五回内国勸業博覧会の正門前で説教するのを見る。(『草

稿「第三篇」(一) (或る男、其姉の死) 『自転車』 関連草稿五) (『自転車』)

* 『歌舞伎年表』 第八巻によれば、四月に神戸の大黒座では、「敷皮」「三日月次郎吉」を上演。我当の重忠、次郎吉。

* 『義太夫年表』 明治篇によれば、三月二日から四月二十三日まで文楽座で、「本朝廿四孝」大序より四段目まで、

「近頃河原達引」 四条河原の段・堀川の段を上演。堀川の段は越路太夫、人形遣は紋十郎のお俊、玉造の与次郎。

* 『近代歌舞伎年表』 大阪篇第四巻によれば、三月一日から四月十二日まで中劇場で「義経千本桜」釣瓶寿司の場

(いがみの権太・中村雁治郎) を上演。

* 『近代歌舞伎年表』 京都篇第四巻によれば、四月一日から二十四日まで歌舞伎座で「時三升桔梗旗揚」(光秀・市川

団藏) 「世話情浮名横櫛」源氏店の場(切られ与三郎・市川団藏、編蝠安・実川延二郎) を上演。

筑波から、木下利玄が、直哉に絵葉書を出す。(『志賀直哉宛書簡集』)

靖国神社大祭に付き、学習院学生一同参拜。(『学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月』「記事摘要」)

歌舞伎座で「春日局」「素襖落」「女俠駒形おせん」を上演。團十郎の春日局。(『続続歌舞伎年代記』乾巻)

直哉は團十郎の春日局は面白くなかった。(『夢か』) (座談会『回顧』)

天皇・皇后の京都からの還幸を学習院学生一同宮城正門外で奉迎。(『学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月』「記事摘要」)

輔仁会英語講演会を開催。(『学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月』「輔仁会記事摘要」)

異母妹・志賀隆子が生まれる。(『志賀家系図』)

東京座で『金色夜叉』を上演。高田実の荒尾讓介、山田九州男のお宮。(『歌舞伎年表』八巻) (大笹吉雄『日本現代演劇

史』明治・大正篇)

里見弴『君と私』(四)によれば、直哉は、有島生馬、里見弴、黒木三次と、本郷座に『金色夜叉』を見に行ったと

6・14)

6・3

5・30

5・11

5・9)

5・6

4・28

あるが、東京座の誤りか。

『金色夜叉』の他にも、直哉と里見淳とは、歌舞伎座の大喜利の「乗合船」で林中の出語り、菊五郎の才蔵をしたのなどを見に行った。(里見淳『志賀君との交友記』)

7・2~3

有島生馬・里見淳・柳谷午郎(柳黒)・田村寛貞(勇雪)・黒木三次(天外)・志賀直哉(半月)で多摩川へテント旅行。

高田実の声色や菊五郎の才蔵の歩き振りを真似たりする。(里見淳『君と私』四)(川村弘『天幕行』M36・11『学習院輔仁

会雑誌』61号)

7・11

学習院正堂で卒業証書授与式。(『学習院一覽 明治三十六年九月~三十七年八月』「記事摘要」)

直哉は、学習院中等学科を卒業。成績は国文と武課のみ甲、他はすべて乙。品行中上。順位は六位。(新『志賀直哉全集』年譜)

7・23

東京音楽学校奏楽堂におけるグルックの歌劇『オルフォイス』に柴田環(のちの三浦環)が百合姫として主演。環の評価は学内外に高まった。(田辺久之『考証 三浦環』)

直哉は、この『オルフォイス』は聴かなかったが、帝劇で、環が清水金太郎らと『熊野』(M45・2)を、サルコリと『カヴァレリア・ルスティカナ』を唄った頃(M44・12)までは好きで、割りに聴いていた。(『三浦環の死』)

8?

直哉は、箱根芦の湯に志賀直道・留女・英子と滞在中、横浜の女学校の教師をしている二十五、六の混血児で子持ちの女性と宿屋で一緒になる。『桜痴放言』を貸してくれると言う。直哉は、歌舞伎座へ桐竹紋十郎が来た事を新聞で知って、東京に戻り、「重の井子別」に感服して、頼まれた坪内逍遙『近松之研究』を携え、四日目に芦の湯に戻る。その女性の男の子が脳膜炎になる。女性の言葉を留女は取り次ごとしない。(草稿『第三篇』九)

志賀直道が晩年一番よく行ったのは、箱根芦の湯の紀伊国屋。志賀直道・留女・直哉・英子と女中で、大概三週間くらいの予定で行った。(『祖父』二十)(実吉英子『若い頃の兄志賀直哉の憶い出』「志賀直哉全集・月報」)

*八月十日から歌舞伎座で文楽座の人形浄瑠璃を上演。「御祝儀式三番叟」、「義士銘々伝」源藏出立の段、「絵本太功記」十段目、「碁太平記白石噺」七段目、「菅原伝授手習鑑」四段目切(寺子屋)、「義経千本桜」道行から御殿まで。

大隅太夫一座。人形遣は桐竹紋十郎ら。(「歌舞伎年表」八巻)

この時か? / 別の年の夏か?

芦の湖で宿屋の流し水の出る所に蝶蠅が集まっているのを見て、直哉は、蝶蠅に生まれ変わったら堪らないと思った。

(「城の崎にて」)

この年か? / 前年か? 8月中旬過ぎ

直哉は、岩元禎と共に鹿野山に赴き、有島生馬、里見弴、田村寛貞と合流。カント・ショウペンハワー・ヘーゲルなどが話題になる。岩元が、岩に皆の頭文字を取ったギリシャ語の星を意味する言葉(STER)を彫りつける。その後、岩元と直哉とで房州旅行。里見弴は、この時鹿野山で、木村鷹太郎「バイロン 文界之大魔王」(M35・9・1発刊)を読んだ。(里見弴『君と私』三)(里見弴『小説 二十五歳まで』)(祖父『二十一』)(有島生馬『思い出の我』)

この年の夏休みか?

夏休みの終わり頃、直哉は岩元禎の許に通い、ドイツ語を習う。朝九時から夜九時まで、一週間で、英語で書いたホイトニーの小文典を仕上げた。(座談会『志賀直哉日記をめぐって』)

直哉は、岩元禎に毎日ドイツ語を仕込まれ、辛さの余り岩元の許に通う途中涙をこぼす。(有島生馬『思い出の我』)

9 高等学科へ進学。……………

9・11 学習院で学年始業式。(『学習院一覽 明治三十六年九月―三十七年八月』「記事摘要」)

小諸から、有島生馬が、直哉に葉書を出す。(志賀直哉宛書簡集)

9・13 九代目市川團十郎が死去。(『続続歌舞伎年代記』乾巻)

9・14 内村鑑三が角筈聖書研究会を一時解散とする。(『内村鑑三全集』年譜)

この頃か? 今度落第してきた男の墮落ぶりを武者小路実篤らが糾弾した際、直哉は、しらばっくれる男に武者小路実篤の気持ち

を説明する。(武者小路実篤『或る男』七十七)

9・23 輔仁会の委員改選。(『学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月』「輔仁会記事摘要」)

高等学科一年級代表委員に、志賀直哉・有馬頼寧が選出される。(M36・11「学習院輔仁会雑誌」61号「雑報」)

10・1 輔仁会の第七回陸上運動会を開催。(『学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月』「輔仁会記事摘要」)

*M36・11「学習院輔仁会雑誌」61号「雑報」によれば、十一月十一日開催だが存疑。

10・15 学習院正堂で、大村仁太郎・白鳥庫吉・山口弘一の帰朝歓迎会を開催。(『学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月』

「輔仁会記事摘要」)

10・18 学習院にて開院記念式。(『学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月』「記事摘要」)

輔仁会秋季大会を開催。(『学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月』「輔仁会記事摘要」)

10・20 高等学科及び中等学科四年級以上の学生百二十八名が佐原地方へ二泊行軍。(『学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年

八月』「記事摘要」)

10・21 直哉は、佐原から、香取神宮の絵葉書を木下利玄に出す。(M36・10・21木下利玄宛書簡)

正親町公和が、佐原から、絵葉書を直哉に出す。(『志賀直哉宛書簡』)

10・23 木下利玄が、直哉に葉書を出す。(『志賀直哉宛書簡』)

木下利玄が、直哉に絵葉書を出す。(『志賀直哉宛書簡集』)

10・30 直哉は、新富座にて川上一座のお伽芝居『狐の裁判』『浮かれ胡弓』を見る。隣の柵に居たジャック及び稲・プリン

クリーに会う。(『手帳7』補⑤p11)(『草稿』第三篇「四」)(『天津順吉』第一一三)

『狐の裁判』『浮かれ胡弓』は、明治三十六年十月本郷座で上演された我が国初のお伽芝居。殊に貞奴主演の『浮かれ胡弓』が好評だった。(大笹吉雄『日本現代演劇史』明治・大正篇)

尾崎紅葉の葬儀。紅葉は、青山墓地に葬られる。(『紅葉全集』年譜)

11・2

直哉は、兼ねてから愛読していた尾崎紅葉の葬列を学習院の塀によじ登って見送った。付き添っている人々を、鏡花、風葉、春葉らだろうと思う。(『泉鏡花の憶ひ出』)

11・3

学習院にて天長節奉祝式を挙行、その後、学生一同、青山練兵場で観兵式を拝観。(『学習院一覽』明治三十六年九月〜三十七年八月)『記事摘要』

11・6

靖国神社大祭に付き、学習院学生一同参拝。(『学習院一覽』明治三十六年九月〜三十七年八月)『記事摘要』

11・9

正親町公和が、絵葉書を直哉に出す。(『志賀直哉宛書簡』)

11・11

兵庫県下への行幸に付き、学習院学生一同宮城正門外で奉送。(『学習院一覽』明治三十六年九月〜三十七年八月)『記事摘要』

11・16

学習院学生一同、赤坂離宮御苑で菊花を拝観。(『学習院一覽』明治三十六年九月〜三十七年八月)『記事摘要』

11・19

還幸を学習院学生一同、宮城正門外で奉迎。(『学習院一覽』明治三十六年九月〜三十七年八月)『記事摘要』

11・21

学習院で柔道大会。(『学習院一覽』明治三十六年九月〜三十七年八月)『記事摘要』

11・21

歌舞伎座で「菅原伝授手習鑑」「壺坂靈驗記」「廓文章」を上演。梅幸の夕霧、羽左衛門の伊左衛門。(『統統歌舞伎年代記』乾巻)

直哉は、細川護立に誘われ、細川のテニス友達であるプリンクリーや木下利玄らと歌舞伎座を見学し、プリンクリー

の知り合いの六代目尾上菊五郎に楽屋を案内して貰う。(『楽屋見物』)

11・24

邦語演説会例会で、直哉は、「熱意」という演説をする。(M37・3「学習院輔仁会雑誌」62号「批評」)

- 11・26 「学習院輔仁会雑誌」第六十一号「秋季行軍記事」欄に、木下利玄（雁来紅）・細川護立（むらさき）・正親町公和（鈔鷗）・志賀直哉（〇、△）が連名で、「銃煙」を発表。
- 12・2 有島生馬が、直哉に絵葉書を出す。（『志賀直哉宛書簡集』）
- 12・5 学習院で剣道大会。（『学習院一覽 明治三十六年九月〜三十七年八月』「記事摘要」）
- 12・6 木下利玄が、直哉に絵葉書を出す。（『志賀直哉宛書簡集』）
- 12・11 有島生馬が、直哉に絵葉書を出す。（『志賀直哉宛書簡集』）
- 12・20 木下利玄が、直哉に絵葉書を出す。「金色夜叉」を読み終わった、「照葉狂言」を読もうか、直哉に貰った吉右衛門・菊五郎の「戻駕」の写真を見た、などと記す。（『志賀直哉宛書簡集』）
- 12・21 正親町公和が、直哉に絵葉書を出す。（『志賀直哉宛書簡集』）
- 12・24 正親町公和が、直哉に絵葉書を出す。（『志賀直哉宛書簡集』）
- 直哉は、有島生馬に誘われて、下谷の寄席に、娘義太夫の豊竹昇之助を聞きに行き、夢中になる。すぐに昇之助熱が、仲間内に広まる。ゴリキリーの『二十六人と一人』のように皆に共通のものとして遠くから偶像化していた。アンデルセンの『即興詩人』から「吾々のアンナンチャタ」と言ったり、昇を *aufgehen* と訳して、アウフと呼んでいた。
- （『濁った頭』関連草稿）（『蝕まれた友情』一）（未定稿137「マリイ・マグダレーン」）（M 37・1・11、2・16日記）
- 直哉は、義太夫を聞いて、仕事で人を能動的に感動させたいという欲望を感じた。（対談『芸術よもやま話』）
- この日、直哉は、昇之助の「契情曾我廓龜鑑」（小磯ヶ原、吉花の「御所桜堀川夜討」）三段目を聞いた。（M 37・1・11日記）
- 木下利玄が、直哉に力士・大江山の絵葉書を出す。（『志賀直哉宛書簡集』）
- 直哉は、昇之助の「恋女房染分手綱」十段目（重の井子別）、吉花の「恋娘昔八丈」鈴ヶ森の段、巴勝の「閑取」二代勝

負附」(秋津島内)、若之助の「菅原伝授手習鑑」四段目切(寺子屋、綱枝の「蝶花形名歌島台」八段目(小坂部館)、綾登司の「傾城阿波の鳴門」八段目を聞く。(M37・1・11日記)

この日は、田中平一を誘って行った。(『濁った頭』関連草稿)

12・26 直哉は、昇之助の「近頃河原達引」堀川の段、吉花の「絵本太功記」十段目、若之助の「碁太平記白石嘶」七段目

(揚屋)を聞く。(M37・1・11日記)

この日は、木下利玄を誘って行った。(『濁った頭』関連草稿)(M37・3・3直哉宛木下利玄書簡)

12・27 直哉は、昇之助の「傾城阿波の鳴門」八段目、吉花の「生写朝顔話」宿屋の段、巴勝の「ひらかな盛衰記」三段目

(松右衛門逆櫓)、若之助の「恋女房染分手綱」十段目(重の井子別)を聞く。(M37・1・11日記)

12・29 直哉は、昇之助の「御所桜堀川夜討」三段目、吉花の「碁太平記白石嘶」七段目(揚屋)、巴勝の「桜鏝恨鞍鞞」(鰻

谷)、若之助の「玉藻前職杖」三段目を聞く。(M37・1・11日記)

木下利玄が、直哉に絵葉書を出す。吉右衛門の写真を七枚買ったと記す。(志賀直哉宛書簡集)

12・30 直哉は、昇之助の「壺坂靈驗記」、吉花の「奥州安達原」三段目を聞く。(M37・1・11日記)

12・31 この時点で、第一部一年級は、一條道良、木下利玄、細川護立、徳川慶久、仙石政恒、武者小路実篤、志賀直哉、斉藤義雄、北島貴孝、裏松友光、正親町公和、林忠一、三島弥吉、加藤泰吉、二條厚基、岩倉具美、華園称応、黒田長

敬、佐野智勝、中川庄九郎、福井発太郎、森川恒、斉藤博、吉光長一、石原晋太郎、藤塚本吉。(『学習院一覽』明治三十

十六年九月〜三十七年八月)

一部は法文科、二部は理工農科、三部は医科。(有馬頼寧『七十年の回想』)

木下利玄が、直哉に豊竹昇之助の絵葉書を出す。(『志賀直哉宛書簡集』)

この年か?

(十九)

直哉は、文学をやる事にし、一部八円のチャップマン訳『ホーマー』を丸善から取り寄せる。「学校の本もろくに読めもしない癖に」と父に言われ、怒って口ごたえをし、「今度は五十円のシェークスピアのケンブリッジ・エディションを誂えるつもりです」と言う。『暗夜行路』草稿13上

この頃か？
(高等科の頃)

三島弥吉の所で斎藤博から八八を教わったのが、直哉が花札を引く最初。志賀直温は暮を好んだが、家族が花札をするのを嫌ったため、志賀家では花札は引かなかった。(阿川弘之『志賀直哉』)

この頃からか？ (二十歳代の初め頃) (二十五、六)

直哉は、死ぬのが非常に恐かった。夜、明かりを消して眠れずにいると、無限の暗闇で死の方へどんどん行くような気がして恐くて、日が暮れるのがいやだった。(阿川弘之との対談『朝の訪問』(座談会『志賀直哉縦横談』)

この年からか？ (学習院の高等科になった頃から)

志賀直温は、将来の話の出る度、直哉に「大学を出たら必ず自活してくれ」と言う。直哉は肝試しで臆病者が強い子供に意地悪をされる時のような心細さを感じる。(『天津順吉』第一一四)

この頃からか？ (高等科時代)

直哉は、東京の郊外の散歩を日曜毎にした。堀の内―大宮八幡―井の頭という順に、よく歩いた。(『暗夜行路』草稿13

廿一)